

# アトリエ 琉游舎 だより 51号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2019年4月24日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## 時の境界を渡る

- ・10連休が近づいてきました。皆さん10連休の予定はお決まりですか？琉游舎は何も特別な予定はありません。特別な予定もなくいつも通りの琉游舎であることが決まっています。
- ・学校や仕事が休みになると、嬉しい反面ちょっと休みをもてあましてしまうのでは、というような贅沢な悩みも起こるかもしれません。
- ・病院や役所などの公共的な役割の施設が休みになったり、市営バスが運休になったりと手放しで10連休を喜べない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。
- ・なぜ10連休なのかと言えば、5月1日が祝日となったからです。そうすると祝日法により祝日に挟まれた平日もオセロゲームのようにひっくり返って祝日になるという訳です。
- ・4月30日と5月1日の間に引かれた境界線は皆さんよくご存じのことですね。空間の境界線は、例えば国境であっても行ったり来たりは可能ですが「時」の境界線は渡ったらもうあとには戻れません。この「時」の境界線への思いは人それぞれでしょう。私はもう戻れないのだという自覚と緊張感だけは失わないように時の境界を渡りたいと思います。
- ・時の境界線も空間の境界線も実は客観的に見ることはできないものなのです。地図の上には国境線はあっても、空の上から見た地球には国を隔てる線はどこにも書かれていないはず。それは自己と他者を区別するために引かれた主観的な線なのかもしれません。
- ・私は境界のこちら側の過去に感謝をし、境界のあちら側の未来に思いをめぐらしながらありのままの10連休を迎えたいと思っています。琉游舎でお待ちしています。

**写経会**

5月5日(日)  
13時半から

**詩話会**

5月11日(土)  
13時半から

**読書会**

5月14日(火) 13時半から  
5月28日(火)

**映画会**

毎週木曜日  
13時半から

**10連休も毎日開いています**

4/25 木	13時半	我が道を往く (126分)	アカデミー賞作品賞受賞。ニューヨークの古びた教会の副神父として派遣されたマリオは街の人々に笑顔を与え人望を集める。やがて教会は火事に会い消失する。そして、、、
<b>5月2日(木)の映画会はお休みします</b>			
5/9 木	13時半	オルフェ (95分)	ジャン・コクトー監督。詩人で音楽家のオルフェウスは死んだ妻を取り戻すために死者の国へ乗り込んでいく、というギリシャ神話を現代に置き換えて撮った幻想的な作品。
5/16 木	13時半	ブルックリン横丁 (123分)	ニューヨークの下町が舞台。生活力のない芸人とふたりの子供と暮らす主婦ケイティ。貧しくも幸せに暮らす家族の姿を描いたヒューマンドラマ。
5/23 木	13時半	北ホテル (92分)	マルセル・カルネ監督。運河沿いの安宿北ホテル。心中を図ってひとり生き残った女がそのホテルで働き始めるが、、、フランスメロドラマの傑作。
5/30 木	13時半	オペラハット (115分)	ゲーリー・クーパー主演。田舎町で小さな町工場を経営する青年に突如舞い込んだ莫大な遺産。世間の注目するニュースとなるが、、、

いつの間にか4月も半ばを過ぎ、桜が咲きそして散っていきました。ただここコリーナではそれはソメイヨシノだけに言えることで、まだ様々な種類の山桜があちこちに咲き誇っています。植物に関しては全く門外漢の私ですが、先に葉をつけてから花が咲く桜、花が散ってから葉をつける桜、葉と花をほぼ同時につける桜など、いろいろな種類の桜のあることがここでは観察できます。日当たりや土壌などが原因でそれぞれの姿を見せているだけなのかもしれません。あるいは専門の植物学者たちが丹念に調べればいくつかの種類と名前に分類されるものなのかもしれません。しかし私にとってはいろいろな桜があり、おのおのがそれぞれのところでありのまま、おもうがままに咲いてくれてさえあれば、それが一番美しいのです。

人は存在するものを分類してそこに名前を付けずにはいられない生きものです。「分類」をごく簡略にまとめれば「異なる存在同士の類似点と相違点を見極め、類似点の多数派と相違点の多数派との間に境界線を引くこと」そして「それぞれにAやBという名前を与えその境界に客観性を与えること」だと思っています。西洋の哲学や科学はギリシャ時代以来ずっとこの作業を理性という名の下に続けてきたのでしょう。ですから分類され名前がつけられていく一連の作業は論理的であり客観的であることが保証されるのです。ただこの客観的という評価軸が、今私の中では、お釈迦様に帰依して以来揺らぎ始めてきているようなのです。

「初めにロゴスありき」に端的に表されている西洋的思考は、全ての存在は神＝ロゴス＝理性（論理）によって真偽・正邪・善悪が認定されます。つまりロゴスによって分類し命名された存在は客観的な存在価値の保証が与えられるということです。ところが仏教の教えは「初めに行いありき」<sup>注1</sup>です。行いの原理は「ありのまま」と言うことです。私には私の、あなたにはあなたのありのままが、桜にも、ポチにも、路傍の石にも、日本にも北朝鮮にだってそれぞれのありのままがあると言うこと。それを認めて、おのおのがあるありのままに行くことを決して否定せず、尊重し、認め合うということです。仏教が全ての生きとし生けるものには「仏性」があると言えるのは、自己を含めた全ての他者の「ありのまま」を認めるからなのです。

「無分別」と言う言葉があります。私達が通常使う意味は「分別がないこと、思慮がなく軽率で道理をわきまえないこと」です。「おまえは分別のないやつだ」と親や先生に言われたら不本意であってもぐっと我慢するでしょうが、友達や年下の人間に言われたら殴りかかってしまうなどの無分別な行動に出してしまうこともあるでしょう。世の人で「あの人は分別のある人だ」という評価を嫌う人はいないでしょう。「あなたは物事の道理をよくご存じの常識のある方ですね」といわれて悪い気はしないはず。ところが仏教の世界では「分別」は「ありのままに観る」ことを妨げる「悟り」には邪魔なものなのです。字に表されている通り「別して分ける」。つまり何らかの主観的尺度により分類していることになるわけで、ありのままに観ることと正反対の評価をしているのです。人の分別はどこまで行っても客観を装った自己の主観的な判断にしか過ぎません。「無分別」は自分と他者とを区別しません。また対象を言葉や概念で分析的に捉えようともしません。つまりは「ありのままに観る」ということ。「無分別」は「悟り」そのものなのです。

私達は社会にあるかぎりあらゆる分別にさらされて生きていかなければなりません。言葉や宗教によって分別され境界が引かれたところが国境となると、自然の山や川などの地形と分別された人たちの居住区が一致していればそれは無分別の自然な境界線とも言えるでしょう。しかし地図を見るとアフリカや中央アジアは国境線が直線にひかれています。誰かが分別したことは一目瞭然ですね。分別し境界線を引くことが公平平等な線であるかそれとも客観を装った恣意的な利害の線なのか、国境に限らずあらゆる境界線には分別が働き、あちら側とこちら側、善悪・貧富・好嫌・敵味方などの選択を私たちに迫ってきます。その時私たちができること、それはまずは分別することで自分と他者との間の類似や相違を見極めることです。その後類似が徒党とならないよう、相違が差別にならないよう、その互いの認識的分別を認め合いながらコミュニケーションによって感情的な分別を埋めていく必要があるのです。感情的な分別を乗り越えた先に初めて「無分別」がみえてくると私は考えます。残念ながら今私達の生きている世界であらゆる存在を「無分別」に観ることができる方はお釈迦様だけです。私たちは分別を超えてあるであろう「無分別」の世界を信じ、そこに向かい行い歩み続ければよいのです。それがお釈迦様の教えを信じることなのです。

境界を接するこちら側とあちら側は、互いの分別を振りかざして角を突き合わせるがよくあります。こちらの分別の有る人たちはあちら側をサッカーのゴールポストを勝手に動かす約束を守らない分別の無い人たちとなじり、あちらの分別の有る人たちはこちら側を歴史を正しく認識しない分別の無い人たちだとなじります。こうなると分別の有無は大同小異。言葉を投げつけあうことによって言葉の無意味化・無力化が起きてしまうのです。もう一度言葉に力と意味を取り戻すためには、ロゴス（分別）が生み出す言葉ではなく、行い（ありのまま）が生み出す言葉に帰って行く必要があると思うのですが、いかがでしょうか？

しだれ桜は気持ちよさそうですね。風にまかせてゆらゆら。風が枝を揺らすのか、ゆれる枝が風となるのか。枝が揺れ花びらが散るとき、大気は風となり、そしてそこに風を観る。 琉游舎：戸井 出琉・恭子  
もとよりしだれ桜にも風にも分別などある訳もないよなあ、と桜吹雪の中で一人うなずきながら筆を置きます。（出琉）

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152  
矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850